

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	その他指導内容や指導方法において特徴ある工夫が行われている実践事例
-------	-----------------------------------

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

奈良県桜井市

○学校名

桜井市立大福小学校

○学校のURL

<http://www4.kcn.ne.jp/~dsupz-ac/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】1・2・4・5・6年生各2学級、3年生3学級

【特別支援学級】2学級 【合計】15学級

○児童生徒数

【全児童数】302人（平成24年5月1日現在）

（内訳：1年生46人、2年生49人、3年生53人、4年生56人、5年生52人、6年生46人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校教育目標】

基礎学力、基本的な生活習慣を養い、自らの生活を向上させるとともに、郷土並びに世界の発展に貢献できる心身共に健全な児童の育成に努める。

- (1) なかまの力になれる子
- (2) すじ道を立てて、よく考える子
- (3) たくましく、がんばりぬく子

【人権教育推進の重点テーマ】

「子どもたち一人一人が認められている実感を！」

～子どもが、教職員が、地域(保護者)が学び育ち合う学校づくりを進めよう～

○人権教育にかかる取組の全体概要

【目標達成のための具体的な実践の柱】

- 子ども同士の協同による学びをつくる。
 - ・ 目指す子ども像・授業像を明確にする。
 - ・ 聴き合い、学び合う授業づくりを通して、3つの力（「聴く力」「訊く力」「応える力」）を子どもたちに付ける。
- 学びとくらし、地域をつないでいく力を育てる。
 - ・ 人権(解放)教育の理念と実践を継承し、深化・発展させる。
 - ・ すべての子が安心して学べる(学級)集団をつくる。
 - ・ 子どもたち自身の生活課題と結びついた人権総合学習を展開する。
 - ・ 子どもたちの意欲と発想を大切に自主活動を活性化する。

3. 特色ある実践事例の内容

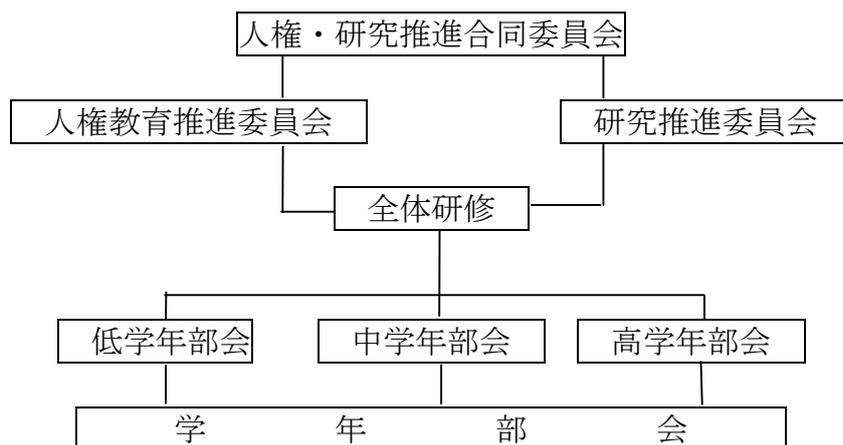
◆ 聴き合い学び合う授業づくりの取組

【取組の背景】

- 厳しい生活背景を有し、自尊感情が育まれず、学習意欲を持つことが困難な状況にある多くの子どもの姿があった。日々発生するトラブルの対応に教員は追われ、徒労感を感じることもあった。生徒指導だけでは限界を感じ、「子どもの姿はおとなの姿」と視点を変えた。そして、1日の多くを過ごす授業でしっかり子どもを育てなければ学校は変わらないとの考えに至った。
- 人は「他者との関わり」によって多くのことを学び成長していく。「他者との関わり」なしには、自尊感情を育てることも、集団づくりを進めることもできない。不安定な心の状態で、自分の弱さや不安を必死に(無意識に)隠そうとしている子ども、真面目に一生懸命がんばっている子ども、全ての子が自分らしさを自覚し、安心して自分を出せる場が必要である。どんな考えも、まちがいやわからないことも、またそれぞれの子ども固有の特性も認め合える場。それが、聴き合い学び合える教室あり、他者との関わりを通して学ぶ授業であると考えた。
- 「みんなが一人のために本気で聴いてくれる。」「共に考えてくれる他者がいる。」このような体験の積み重ねが、子どもたちを勇気づけ、諦めず、逃げずに課題に取り組もうとする意欲や態度を育てていく。また、そういう雰囲気の中でこそ、一人一人が思いやりや考えを出せ、本音を言えるのである。

自分の思いや考えを受け止めてくれる周りの存在は支えとなり、子どもたちは、安心感を得る。そのような場で、子どもたちは学ぶ意識を高め、自他の大切さを認めることができる人権感覚を身に付けていくものと考え、聴き合い学び合う授業づくりに取り組んだ。

【推進体制】



「子どもたち一人一人に認められている実感を！」をテーマにしたこの取組は、10数年前から続く国語科中心の取組であった。しかし、2011年度からは、これを全ての教科、領域に広げ、これまでの取組を検証しながら、「人権が尊重される学校づくり・授業づくり」を再スタートした。その過程では、教職員同士、児童同士、教職員と児童の間の人間関係や、学校・学年・学級としての雰囲気確かめながら、自分と他の人の大切さが認められる安全で安心な環境がつけられているかを取組の検証軸とした。

全教員が3部会に分かれて、一人年間2回の授業公開を通じた授業研究（以下、授業研）に取り組んだ。児童の生活実態をふまえた研究協議や自己研修の振り返り、授業の在り方をめぐり教職員間の経験年数を超えた議論、教材解釈部会での意見交換等を重ねることにより、子どもたちだけでなく、教師自身も、授業研を中心に聴き合い、学び合い、高め合う教職員集団の確立を目指した。

【取組の内容】

願いがあっても出せない、わからないのに「わからない」と言えない。そんな子どもたちを核に据え、全ての子どもが無理をしなくても、互いの考えや疑問を素直に聴き合える授業づくりに取り組んだ。

(1) わかる喜び・学ぶ楽しさを味わう取組

～子ども同士の協同による学び合いを大切にした授業づくり～

- ・ 他者のまなざしや互いの表情を感じながら学ぶため、コの字型やV字型等、机の配置を工夫した。
- ・ 授業の前半から、ペア学習（2人組学習）を効果的に何度か入れ、全ての子どもを学びに参加させ、徹底して聴き合う授業に取り組んだ。
- ・ 子どもたちが〈満足感〉〈安心感〉〈充実感〉を得られるよう、少人数授業（算数科）に取り組んだ。



(2) 学び合いを広げ、深めるための工夫

① 授業における教師の役割の共通理解

- ・ 困っている子、学べていない子、参加できていない子に関わった。
- ・ 一人の子どもが持つ「困っている気持ち」をグループの子につなぎ、子どもたちの「聴く力」「訊く力」「応える力」を育むことを目指した。

② 子どもたちの手本としての教師自身の聴き方・話し方・応え方

- ・ 教師がまず、聴く手本として子どもたちの声をじっくり聴いた。時には、声にはならない言葉も聴き取り、子ども相互の関わりを築くために、子どもと子どもをつないだ。
- ・ 無駄のない選ばれた言葉・吟味された言葉で丁寧に話すことに目指した。
- ・ わからないこと、つまずき、まちがい、あやふやな発言を大事に受けとめ、教材と子ども、子どもと子ども、知識と知識をつなぐための声かけを工夫した。

③ 子どもの力を信じ、教員が出過ぎない、子どもを主体とした授業づくりに取り組んだ。

(3) 授業研究の実施

① 授業研の日常化

- ・ 教室を開き、互いに学び合うために、全体研修等で、一人年間2回授業研を行った。



② 研究協議の充実

- ・ 授業観察の観点（子どもの何を観るのか、教師の何を観るのか等）を明確にし、全員で共有した。
- ・ 授業後の研究協議を、教師全員が授業を通しての気づきや学び、思い、悩みを出し合う場として位置付け、互いの意見を受け止め、高め合う教師集団づくりに取り組んだ。
- ・ 児童の反応や変わり目を大切にするのはもちろんのこと、これまでの教師の授業スタイルの概念砕きという壁にも向き合った。

③ 個人研究教科やテーマを設定

- ・ 一人一人が設定した研究教科やテーマに基づき、年間を通じた授業改善に取り組んだ。そして、授業研は、個人テーマ追求の場として位置付けた。

【取組を実現するにあたって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫】

(1) 課題

どのようにすれば、子どもたちが学習規律を身に付けるとともに、聴き合い、高め合い、学び合う授業になるのか。

(2) 課題に対して講じた工夫

① 学び合い、高め合う教職員集団づくり

一人年間2回の授業研を中心に、教職員自身が互いに聴き合い、学び合い、高め合う場としての研究協議を日常化した。

※平成23年度 校内授業研(6回)、部会授業研(4回)

学年別授業研(5回)、全体研修(4回)

平成24年度 校内授業研(3回)、部会別授業研(12回)、
学年授業研(12回)、全体研修(6回)、
公開授業研修会(1回)

② 「ちーむだいふくだより」の発行

研修により学んだことを共有し、共通理解を図るために「ちーむだいふくだより」を発行した。

③ 週1回の学年部会を開催

全ての教職員で子どもたちを見るという基本姿勢で、子どもの実態を交流したり、授業づくりについて話し合ったりした。

(3) 成果

① 授業研の回数を重ねることで、子どもの動きや表情がよく見えるようになった。

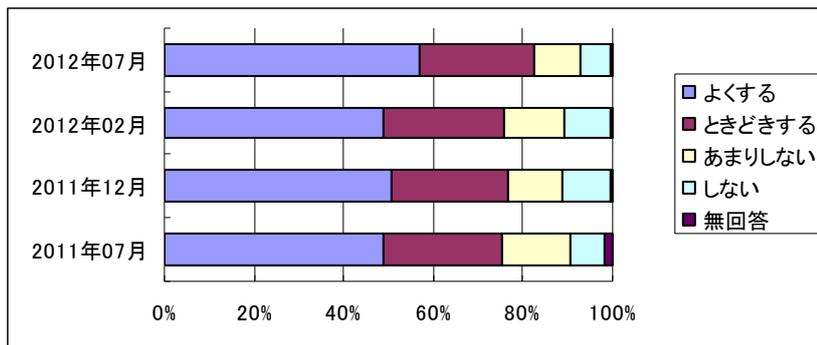
② 授業研で学んだことを、自分の授業に活かしたいと思って取り組むようになった。毎日の授業を大事にすることの重要性を改めて認識できた。

③ 授業研は、個々の教職員が持っていた価値観や授業観、子ども観を問い直し、捉え直す場となった。

4. 実践事例の実績、実施による効果

【児童生活実態アンケートより】

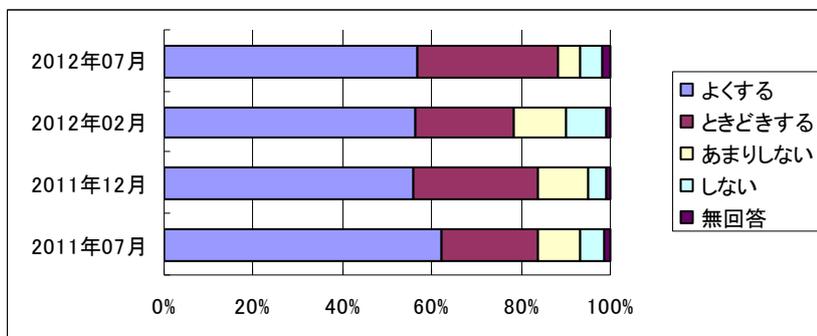
(1) わからないことがあると、友だちに「教えて」と声をかけていますか。



2011年度初めから、約半数前後の児童が「よくする」と答えている。また、「ときどきする」と答えた児童を合わせると今年度は8割以上になった。アンケートには「訊いてよくわかった。」「すっきりした。」「勉強が楽しくなる。」という子どもたちの声が寄せられた。このことは、これまで繰り返し、「訊く」ことや「伝える」ことの大切さを指導してきた成果だと考えられる。

一方、「しない」と答えた児童の割合が、あまり減少していないことは課題であり、心をまだ開ききれない児童が、1年前と変わっていない現状が見て取れる。今後は、聴き合い・学び合う関係をさらに深めることで、素直に「教えて」と言える児童をさらに増やすことで、これまで訊けなかった児童にも良い影響を与えていきたい。

(2) 「教えて」と言われた時は、教えていますか。

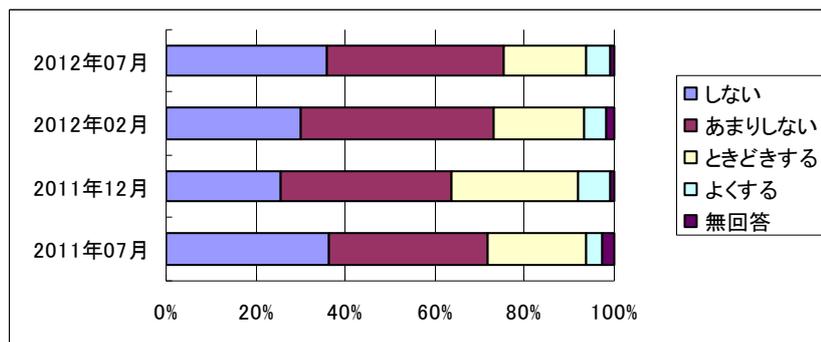


2011年度7月には、「教えて」と訊かれた時に応えようとする児童の割合は、「ときどきする」も含めると、8割を超えていた。その後3学期に一度減少したが、2012年度の1学期には、9割近くまで増えてきている。

「教えてもらったことは忘れない。」「応えてもらえたらうれしい。」「教えてもらっていい気持ちになった。」など、アンケートに寄せられた子どもたちの声からは、訊いた児童が、教えてもらったうれしさを感じ取りながら、学んでいる様子がうかがえる。訊かれた時に丁寧に応えようとする関係が築かれている時に、児童から「教えて」という言葉が出やすくなる。このことは、(1)の問いと関連しているとも考えられる。

課題としては、「しない」と答えている児童が約5%残っていることである。これらの児童たちが訊かれた時に、素直に自分の考えを言うことができる安心感をもたせるとともに、教えてもらった時の喜び、教えてわかってもらった時の喜びを是非味わわせたい。

(3) 友だちを傷つけたり、いやな思いをさせたりしていませんか。



昨年度に比べると徐々にではあるが、いやな思いをさせる児童が減少してきている。これは、一見すると些細なことと思うことでも決して見逃さず、全教職員が共通理解のもと、当該児童に行動について振り返り、考えさせる細やかな指導を続けた成果が現れたのではないかと考える。

以上の調査結果に現れているように、児童の生活は、2011年度より少しずつ改善されてきているように思われる。これは、学習集団の中に、他者から認められ、安心して生活できる環境が、少しずつではあるが形成されつつあるからではないかと考える。また、学級や学校に、安心して生活できる環境が築き上げられつつあるからではないかと思う。その背景には、学びの保障として行っているペアやグループでの学習の取組がある。安心して訊ける環境、訊けばしっかり応えてもらえるという体験を積んだ児童が、少しずつではあるが、自己の学習意識をプラス方向に変えつつあると考えられる。

5. 実践事例についての評価

【取組の成果と課題】

- これまでの授業公開だけでは気付かなかった、子どもの見方やペア学習・グループ学習の意義が、授業公開や授業研を日常化することで、より明確になり、理解が深まり、教職員の共通認識のもと授業づくりに取り組むことができた。
その結果、これまで意見があっても出せなかったり、表現の仕方がわからなかった子どもたちや、あやふやではあるが何かを感じた子どもたちが、小グループで聴き合い、学び合う学習体験を重ねることにより、安心感を高め、自信を深めクラス全体の場で生き生きと自己を表現する姿が見られるようになった。
- 人権教材を扱う学習においても、教師の一方的に教える授業であったり、子どもたちが友だちの発言に共感して聴けない学習活動であれば、その効果は望めない。互いの意見をすりあわせて、自分が気付かなかった思いや考えに出会うことにより、子どもたちは学びを深め、つながっていくことを教職員間で共有し、取り組んだ。聴き合い学び合う授業での教師の役割は、子どもの声をじっくり聴いて、子ども同士をつなぐことである。そして、どの子ども授業の中に位置付けることは、人権教育の重要な課題である。
- 本校の子どもたちは、自分が発言することで満足し、まだ、友だちの声を聴く楽しさや大切さを感じているとは言えない。また、まだまだ聴く力が弱いと言わざるを得ない。聴くとは、相手の話す内容を聴き取るだけでなく、考え方や気持ちを理解しようと思って耳を傾けることである。相手の存在を受け入れることである。聴く力の弱さは、関係づくりの弱さでもある捉え、さらに授業の質を高めることを目指したい。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

桜井市立大福小学校

「子どもたち一人一人に認められている実感を！」を重点テーマにした取組が、当初は国語科中心であったものから、すべての教科・領域を対象にした「人権が尊重される学校づくり・授業づくり」へと発展しつつある。平成23年度・24年度の2年間で合計53回に及ぶ各種授業研が実施され、「聴きあい、高め合い、学び合う」教室をつくる取組が行われてきた点が注目される。すべての子どもがわかる喜びや学ぶ楽しさを味わえるようにするため、「願いがあっても出せない」子どもたちを核にすえた取組と子ども主体の授業づくりが行われてきた。その結果、児童生活実態アンケートの結果をみても、しだいに成果があがっていることが確認されている。以上のことから、「第三次とりまとめ」がめざす「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」を実現するための取組として参考になる。